府立福井高等学校
校長　村林　隆志

令和７年度　学校経営計画及び学校評価

１　めざす学校像

校訓「夢・発見・実現」のもと、北摂地域に根付いた総合学科高校として、生徒の興味・関心に応じた各系列での多様な学びを通し、豊かに暮らすためのスキルを身に着けさせるとともに、学校全体での人権教育・生徒支援・生活指導・キャリア教育・教科指導等を密接に連携させた支援・指導を行い、自他敬愛の心で協働できる人材を育成し、生徒一人ひとりの「進路実現」を具現する。

１ 多文化共生の土壌をいかし、自分と異なる背景を持つ人との交流を通してソフトスキルを養い、柔軟で寛容な心を持つ多様な人材を育てる。

２ ＩＣＴや先進設備を活用し、コアカリキュラム「ドリカム」を中心とした総合学科の学びで、コミュニケーション能力や課題解決力を育む教育を実践する。

３ 生徒それぞれが持つ力を伸長するとともに、地域との連携を軸として、社会・地域に愛される態度を培う。

２　中期的目標

１「夢・発見・実現」―自己の具体的なキャリアビジョンを設定し、実現に向け粘り強く継続する力をつけるキャリア教育を推進する―

（1）「ドリカム授業」をコアカリキュラムと位置づけ、全ての授業との関連を持たせつつ、自分で考え自分の言葉で表現できる生徒を育成する。

ア　３年間を見据えたグループ学習等を通じて生徒の多様な出会いや体験を通じて自分の将来像を描く中で、ソフトスキルを養い、自尊感情や社会的有用感に富んだ人間性を育成し、生徒に自己実現させる。

イ　３年生課題研究において、自分が選んだテーマを研究し、自分の考えをまとめたり、プレゼンテーションしたりする経験を通じて、視野を広げ考える力・伝える力を育みながら、自らの個性・生き方を磨き、自己の進路を切り開く力を育成し、生徒に自己実現させる。

ウ　授業やその延長上にある大会・コンテスト・検定等に積極的にチャレンジし、生涯を通じて学ぶ力を身につけ、幅広い進路を確保し、生徒に自己実現させる。

（2）立地する茨木市を中心として生徒の地元進学率が高い中で、「日本語指導の選抜も行っている総合学科」の特徴を活かし、グローバルだけれども「ちいさな総合学科」である特徴を生かした進路を含めて、進路決定率 95％（Ｒ４:87％、Ｒ５:90％、Ｒ６:90％）をめざす。

ア　多様化が進む社会で、違いや家庭環境等にかかわらず、誰もが生き生きとした人生を享受できるよう、自らとは異なる状況の人々と接する機会や異なる環境に身を置く機会を意図的・計画的に設定し、すべての人の人権を尊重する心を養いつつ、キャリア形成する取り組みを行う。

イ　進路ガイダンス、オープンキャンパス、企業訪問、地域活動、ボランティア活動への参加の機会を設定し、生徒が次の進学先・就職先や社会活動について体験を通して知る機会を作り、すべての生徒が進路希望やそれぞれの生き方を具体的に考えることを支援する。

ウ　教育産業や１人１台端末を積極的に活用し、生徒の学習意欲を向上させ、基礎学力を入学時よりも伸ばすことで多様な進路を保証する。

２「夢・発見・実現」―総合学科ならではの授業を通じ、社会情勢や課題の本質を理解し、変化の時代を生き抜く力を育成する―

（1）生徒の実態等に基づき、基礎学力を定着させるとともに、興味関心・進路希望に応じた教育内容を創造し、生徒の学ぶ力を向上させる。

ア　総合学科として、各系列の整理とカリキュラムの充実を図るとともに、授業内容を工夫して生徒の学ぶ力を向上させる。

イ　学び直しや少人数展開授業の実施等により、文章読解の力など基礎学力の定着を支援し、生徒の学ぶ力を向上させる。

（2）主体的・対話的で深い学びを実現した授業づくりを進め、生徒の学ぶ力を向上させる。

ア　ＤＸを積極的に活用した授業改善および実践を通じて、個々の状況やニーズに応じたより良い教育環境を構築する。

イ　ＤＸを進めるにあたっては「アナログっぽいデジタル」をテーマに、具体物を使って行う思考活動と、事柄のイメージを思い描いて行う思考活動とが、交互に繰り返される過程を重視し、情報・デジタル・理数系といった内容を不得意と避けている生徒も含めて、より良い学びの場を提供する。

イ　「主体的・対話的で深い学び」の推進のため、校内研修や授業見学等を行い、教員全員が相互に実践を共有して生徒の学ぶ力を向上させる。

３「夢・発見・実現」に打ち込める学校 ―安全で安心な学びの場で、社会・地域・人との繋がりを大切に、互いに助け高め合える力を育成する―

（1）すべての生徒が安心・安全を実感できる学校生活を送ることで、自己実現や社会性の獲得を促すための意図的・計画的な生徒支援・指導を行う。

ア　生徒が自発的・主体的に自らを発達・行動させることを意識し、その過程を学校（教職員）が支えていく発達支持的生徒支援・指導を重視する。

イ　生徒一人ひとりが安心・安全を実感し、落ち着いた日常生活を送ることができるよう、保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒支援・指導を行う。

ウ　自己の言動や生活態度をより好ましいものにできるよう自問自答する中でソフトスキルを養い、社会に受け入れられるための自己実現や社会性の獲得を促すとともに、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに生涯を通じて継続的に取り組む力を育成する。

４「夢・発見・実現」のための連携 ―地域をはじめとしたさまざまな連携および多文化共生を推進し、生徒が活き活きと活動できる場を提供する―

（1）生徒一人ひとりをサポートする人権教育・生徒支援の一層の充実を図り、生徒の不安を解消する。

ア　保護者・中学校・本校並びに各生徒の地域や外部の専門人材・支援機関等と連携し、包括的で効果的な生徒支援を行う。

イ　学校行事や交流活動等の生徒が活き活きと活動できる場を、３年間を見通した計画の中で提供する。部活動においては、生徒の自尊感情や集団の中での有用感を高め、興味関心のあることに継続的に取組む力を育成する手立てとする。

ウ　障がいのある生徒や外国にルーツのある生徒等のアクセシビリティの向上を図るとともに、学校全体で取組みを発展させる。

（2）教職員が校経営計画のもと志を一つにし、ソフトスキルを率先して養い、互いに協力し合う中でチームとして機能する職場づくりを推進する。

ア　すべての教職員が適切かつ丁寧な支援を行えるよう情報共有を密にし、カウンセリングマインドを持って、生徒の気持ちに寄り添いながら、生徒が安心して相談できる相談支援体制の充実を図る。

イ　校内研修やディスカッションを通して経験の少ない教員のＯＪＴを図り、併せてミドルリーダーの育成を図る。

ウ　年齢構成等、教員集団の現状を踏まえたうえで、教職員一人ひとりの意識改革と学校全体のチーム作りを図り「働き方改革」に取組む。

エ　「学校における働き方改革の取組みについて」を意識し、校務の効率化を図るとともに「部活動ガイドライン」を遵守する。

（3）絆づくりと活力あるコミュニティの形成により地域とのつながりを充実させる。

ア　これまで培ってきた幼保小中大との連携、地域連携のネットワークを基盤に、地元に根づいた「開かれた学校」つくりを一層推進する。

イ　学校運営協議会および学校教育自己診断等を活用しつつ、保護者や地域のニーズを反映した学校改善に取組み、生徒と地域との協働を進め、総合学科高校としての情報を積極発信する。

府立福井高等学校

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析［令和　7　年　12　月実施分］	学校運営協議会からの意見
【生徒アンケート】 ・29 項目中、１～３P の幅で５項目下降、23 項目が１～６P の幅で上昇。 ・「先生は生徒の意見を聞いてくれる」91%、「担任の先生以外にも気軽に相談できる」項目についても 82%と共に５P 上昇。１・２年生の「先生はプライバシーを守ってくれる」の項目は 85%となり微増である。「いじめについて私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」では１・２年生の肯定的回答が 80%。３年生の 94%と大きく開きがあり、相談体制や初期対応について、生徒にとって安心安全の環境をさらに高める必要がある。 ・「評価の基準について事前に示されており、評価は納得できる」90%「授業はわかりやすく楽しい」78%で５P 上昇。「先生は教え方に工夫をしている」が 90%。「授業などで、豊かな心や人の生き方について考える機会がある」は 87%と５P 上昇しており、教職員の日々の取組みが反映されている。更なる工夫・強化を図りたい。 【保護者アンケート】 ・23 項目中１～５P の幅で５項目降下、12 項目が１～５P の幅で上昇。また、記述による回答もあり特にいじめについてのご要望については、真摯に受け止め学校運営に活かすとともに、「わからない（判断できない）」と回答された保護者の方も多くおられることから、機会あるごとにコミュニケーションを図りたい。教職員と共有し改善を図る。 【教職員アンケート】 ・36 項目中、11 項目微減、25 項目微増。 ・「働き方改革」の中、授業以外の業務についても同僚性を保ち遂行する。 ・教育課程や、互いの違いを認め合い、ともに学ぶ環境である本校の特色の一つを教職員が再確認しあい、職場環境作りをさらに進める。	第１回　　（６月 18 日開催） ・大学生にとっても、福井高校は地域地元の財産となっている。「生徒としっかりとしたコミュニケーション」に努められる学校がどれほどあるかと考える。 ・選択授業（必修授業）の最後にでも、短時間での学びあいの時間を導入してみてはどうか？学びあえる総合学科の実現により向くのではないだろうか。 ・自分が行きたいと思って選んだ学校に通うことのモチベーションの高さに驚く。生徒を学校全体でよく見ていることがわかった 。 ・地域を含め、「すべての要望に応える」でなく、学校組織で見極めする必要があるのではないか。 第２回　　（10 月 29 日開催） ・公立学校の意義として地域連携の強化と、対話的な生徒指導の時間を引き続き重視してほしい。 ・進路決定が早期化する中、高校３年間の支援と卒業後　１年程度のフォローも必要。 ・中間考査の在り方についての検討など時代に合わせた変化は必要。 ・中間考査の在り方についての検討は進路実現・社会理解に向けた前向きな取組み。観点別評価との関係も考慮が必要。 第３回　　（２月４日開催） ・アクションプランが示されたが、教職員が「ねらい」を持って取り組んでもらいたい。 ・学校における「業務量縮減、公立私立の在り方」等、こういった世の中であるからこそ、福井高校のあり方、地域と学校の関わりについて、大切にしていくことが大事である。 ・「多文化」がテーマで連携が続いてきたが、地元中学、地域ともこれ以上に連携づくりを大切にお願いしたい。 ・学校現場に求められるものがますます増えている。さまざまな機関とつながりを持ち教育活動を推進してもらいたい。 ・ミドルリーダーの教職員に向けて、スキル伝承と組織づくりをお願いする。

府立福井高等学校

３　本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標［R６年度値］	自己評価
「夢・発見・実現」　キャリア教育の推進	（１）　コアカリキュラムのドリカム授業で夢を発見させる ｱ､体験型の学習機会の充実	（１） ｱ､多様な社会人との出会いの場や体験・実習を設け、グループ学習等でリアルに進路や生き方について考えさせ、ソフトスキルを養うとともに、自己有用感を向上させ「夢」を「発見」し「実現」へ向かわせる。	（１） ｱ､自己診断アンケートの「進路や生き方」についての肯定的回答：90%維持［91%］。	（１） ｱ、各教科や、ドリカム（探究）授業でのペア・グループワークに注力、授業や、人権学習、学校行事等においてコミュニケーション力の向上に努めた。 91%（○）
	ｲ､主体的に参加し発表する学習機会を充実させ、発想や計画が実現することを実感させる	ｲ､３年生の課題研究でのドリカムフェスタ：総合学科発表会が集大成となるよう自分でテーマを見つけ、自分の言葉でまとめ、他者の意見を聞いてより広く深く思考したうえで発表する経験を繰り返す中で、自己肯定感を向上させ、ポジティブに生きるための取組みを充実させる。	ｲ､総合学科アンケートの「総合学科で学んでよかった」の肯定的回答:90%以上維持［97%］。	ｲ､ドリカムフェスタ（１月）に保護者や地域の方々も来校いただき全学年から６本の成果発表を実施。 「総合学科で学んでよかった」94%（○）
	ｳ､各種挑戦の奨励で実現力を応援する	ｳ､大会・コンテスト・資格等への挑戦を奨励し、前向きな目標を設定して努力する姿勢を育成する。	ｳ､競技団体や認定団体等主催の大会・コンテスト・資格等に挑戦したものや校内での取組みが優秀であったものへの「福井高校賞」授与者数について150件以上を維持する［208件］。	ｳ、軽音楽部やダンス他、少人数や合同部活動で表彰多数。スピーチコンテストや簿記英検等、高みに挑戦する生徒を表彰。今年度は万博関係や教育庁プログラムへの参加も多数あり。 （172件）（○）
	（２）「ちいさな総合学科」での進路実現 ｱ､日々が多文化で他者理解が必要な環境を強みにした総合学科の学び	（２） ｱ､日本語指導の生徒や障がいがある生徒などとも共に学んでいる本校の環境を生かし、年齢・性別・文化・言語・志向など種々の違いを意識する学習機会をさらに設けて、他者理解を深め、誰もが生き生きと暮らせる社会をめざす学習を行う。	（２） ｱ､自己診断の「環境・多文化」・「豊かな心や人の生き方」の項目について肯定的回答各 85％維持［84%・82%］	（２） ｱ､「環境・多文化」　85%（○） 「豊かな心や人の生き方」　87%（○）
	ｲ､直近の進路も大切に学ぶ	ｲ､特徴ある本校での学びを、次のステージでも継続できるよう、自己実現できる進路を見つける参加・体験の機会を提供・推奨する。	ｲ、 自己診断の「進路や生き方」と「進路や奨学金」の項目について肯定的回答各90%維持[91%・88%]	ｲ､「進路や生き方」　91%（○） 「進路や奨学金」　91%（○）

府立福井高等学校

「夢・発見・実現」　変化の時代を生き抜く確かな力の養成	（１） 基礎学力の定着と興味関心・進路・生き方に応じた授業 ｱ､学習指導要領の中で、生徒に則した「ちいさな総合学科」の最適化	（１） ｱ､「日本語指導」の生徒や障がいがある生徒と共に学ぶ環境の中で、将来も地元に残る生徒が多いことも踏まえた「ちいさな総合学科」の特徴を創る。生徒の興味関心やキャリア形成に有用な科目設定・授業展開精選し自己実現を支援する。	（１） ｱ･ｲ､総合学科アンケートの「総合学科で学んでよかった」の肯定的回答:90%以上維持［97%］。 ｱ･ｲ､自己診断アンケートの「他の学校にはない特徴」の肯定的回答：90%以上維持［86%］。	（１） ｱ･ｲ､ 「総合学科で学んでよかった」94%（○） 「他の学校にない特徴」　86%（△） 「総合学科」の特色だけでなく、違いを認めあい、ともに学ぶ環境や風土がある学校として、キャリア教育を工夫改善する。
	ｲ､少人数展開授業・文章読解・学び直しの内容の向上	ｲ､全教科で読解力の育成と学び直しの要素を取り入れた授業を行い、ドリカム授業やＨＲではアンガーマネジメントの内容を盛り込みつつソフトスキルを養う。		
	（２）主体的対話的な授業による学習意欲の向上 ｱ､授業改善の取組み	（２） ｱ､引き続き観点別評価やＩＣＴ活用の有用化を進め、「アナログっぽいデジタル」をテーマに、ＤＸを活用する授業改善にも取り組む。「手や体を動かして考える」具体物を使って行う思考活動と、頭の中に対象とする事柄のイメージを思い描いて行う思考活動とが、交互に繰り返される過程を重視し、具体操作、半具体、半抽象、抽象と段階を踏んで学習を授業改善および実践も行えるよう授業をめざす。	（２） ｱ､自己診断アンケートの「授業が分かりやすい」の肯定的回答：80%［73%］。 あわせて「１人１台端末の効果的活用」90%以上維持［92%］。	（２） ｱ､「授業が分かりやすい」　78%（○） 「１人１台端末の効果的活用」93%（○） 授業が分かりやすいと回答する割合は近年、横ばいである中５P 上昇。日常的に活用している端末を利用し、学習支援クラウドサービスも活用する授業の実践に取り組む。
	ｲ､学習力向上のための研修の実施	ｲ､教員相互の授業見学や研究授業を実施するとともに、授業力向上プロジェクトをミドルリーダーで推進し、生徒の学習力を向上させる。各教員の目標に「主体的･対話的」な授業の工夫を設定し、実践を検証する。	ｲ､自己診断アンケートの「教え方の工夫」と「他の先生の授業見学」の肯定的回答：各 80%以上維持［86%・85%］。	ｲ､「教え方の工夫」　90%（◎） 「他の先生の授業見学」　85%（○） アクティブラーニング（特に対話）を意識した授業を継続する。
「夢・発見・実現」　安全で安心な学びの場の確保	（１）安心・安全を実感できる生徒支援・生徒指導 ｱ､自発的に基本的な習慣と社会性の確立に向かわせる支援・指導の充実	（１） ｱ､学習に限らず、基本的な生活習慣や社会性の獲得についても、達成可能なスモールステップを提示し支援して達成させ、その後は自発的に成長することを促す。	（１） ｱ､自己診断アンケートの「基本的習慣の確立」・「指導は納得」の肯定的回答：各 80%［84%・82%］。	（１） ｱ､「基本的習慣の確立」　85%（○） 「指導は納得」　81%（○） 保護者アンケートからも、「先生は子どもを理解している」項目において、89%の肯定回答を得ることができた。
	ｲ､いじめの防止や早期発見への取組み強化	ｲ､リアルな場でも、ＳＮＳ等の場でも、些細に見えることからでもいじめに発展することを踏まえ、また多対１の関係に始まりがあることを意識して生徒を見守り、少しのことでも訴えがあったり良くない状況が感じられたりする場合には、教員間で情報共有し組織的に対応する。	ｲ､自己診断アンケートの「いじめへの対応」の肯定的回答：100％［86%］。	ｲ､「いじめへの対応」　85%（△） いじめアンケートや生起した事象について、学校全体で情報共有し早期対応を行う環境の再構築に取り組む。
	ｳ､保護者に学校がｱ･ｲの取組みを進めていることの周知と理解の促進。	ｳ､保護者に向けての文書並びにメール等での情報発信強化。あわせて、懇談のほか行事等の機会をとらえての対面・対話を短時間でも確保する。	ｳ､保護者の自己診断アンケートの「生徒指導方針に共感」の回答 85%［86%］あわせて「方針や情報の提供努力」の肯定的回答 90%以上維持［91%］。	ｳ､「生徒指導方針に共感」　86% 「方針や情報の提供」　93% 保護者回答率（＋33P）が高まっている中での数値として（◎）
	ｴ､普段の学校生活の中でのリアルなコミュニケーション力の向上を、相手を思いやり、命や人権を大切にする姿勢につなげる取組みの充実	ｴ､教員はあいさつや呼名など、日々たくさんある機会を大切にし、種々の声掛けを意識的に行う。また日々の授業や行事・部活動等での生徒相互の対話的取組みの場を増やし、支援・指導を繰り返し、互いを思い理解する力を養い、意思疎通の力をつけさせるとともに、いじめ防止などにもつなげていく。	ｴ､自己診断アンケート「命の大切さ・ルール・人権」の肯定的回答：90%［86%］。	ｴ､「命の大切さ・ルール・人権」88%（△） ２年生の数値が３P 上昇。別項目「先生は生徒の意見を聞いてくれる」の肯定的回答が６Pアップの 91%となっており、安心安全の環境と発達支持的生徒支援・指導を継続する。

府立福井高等学校

「夢・発見・実現」　地域連携と多文化共生の推進

	（1）生徒一人ひとりをサポートする教育活動の充実	（1） ｱ､職員研修等で教員各自ならびに生徒連携委員会・保健室等の生徒を支援する組織力を向上させる。 ｲ､ 保護者・中学校との連携を深めるとともに、校内でのＳＣ・ＳＳＷ・ＣＣ・居場所事業者との情報共有・協働支援を強化し、校外でも茨木市子育て担当課・福祉担当課・ユース事業者・茨木警察等との間で進んでいる連携などを、さらに他市や他の地域関係機関等にも広げる。ｱ･ｲあわせて校内外で生徒一人ひとりへのサポートを充実させる。	（1） ｱ･ｲ､自己診断アンケートの「学校に行くのが楽しい」の肯定的回答：80％［76%］。あわせて「先生は相談に親身」･「気軽に相談できる先生」も各 80％［85％・78％］。	（1） ｱ･ｲ､ 「学校に行くのが楽しい」　78％（△） 「先生は相談に親身」　86％（○） 「気軽に相談できる先生」　82％（○） 教職員が生徒と接する時間確保のため、会議等更なる業務改善を図るとともに、取組み計画・内容を継続していく。
		ｳ､コロナ禍で縮小してしまっている体育祭・文化祭・修学旅行等の行事を、生徒の実状にあわせて一体的に再構築する。	ｳ､自己診断アンケートの「行事は楽しく工夫」の肯定的回答：80%維持［81%］。	ｳ､「行事は楽しく工夫」　82％（○） 行事ごとに、生徒の発言や意見を大切にし、教職員と互いに意見を交わし、生徒主体となる行事を実施していく。
		ｴ､同じく縮小してしまっている部活動を部活動大阪モデルなども活用して生徒の自尊感情や継続的に努力する力を養うものとして再構築する。	ｴ､自己診断アンケートの「生徒会・部活動活発」の肯定的回答 70％［66%］。	ｴ､「生徒会・部活動活発」　69％（△） 部活加入率が３割という中で、生徒は充実した高校生活が送れている。生徒会は積極的に活動できており、役員を含むすべての生徒が主体的に活動できる支援や環境を構築していく。
		ｵ､障がいがある生徒や外国ルーツの生徒と他の生徒の関わりについて、日々の関係が教員を介さずとも増えるよう生徒を支援・指導する。	ｵ､教室移動や食事の場面で、ともに過ごす様子の増減で判断。外国ルーツの生徒については、あわせて自己診断アンケートの「共に学ぶ環境」の肯定的回答 85%以上維持［86%］。	ｵ､「ともに学ぶ環境」　87％（○） 多様な生徒同士が「ともに学ぶ」環境があり、授業・部活動・学年・学校行事の多くの場面で学べている。ドリカムフェスタでは「多文化理解」についても発表があり、福井の風土としてさらに推進する。
	（2）地域との絆づくりと活力あるコミュニティの形成 ｱ､地元に根づいた「開かれた学校」づくりの一層の推進	（2） ｱ､福祉の授業や、部活のイベント参加などで積極的に地元と交流することを引き続き復活・継続させ、小中学校等での出前授業も充実させる。茨木市や同人権協会・福井地区等の事業・イベント等にも積極的に参加する。識字・日本語教室、自主防災会等への協力も継続する（地域へのボランティア活動で「地域実習」（１単位）の履修を認めるなどもする）。あわせて、学習支援員・介助員や事業の講師等で地元関係者の協力を求めつつ、本校への理解も深めていただく取組みを行う。	（2） ｱ～ｴ､自己診断アンケートの「地域の人々や校園などと交流」の肯定的回答 80%維持［81%］。識字・日本語教室 30 回維持［31］回。保幼小中校園等への出前授業 10 件［13 件］、交流事業参加 30 件［51 件］。年間を通じて相互の関係が継続する大学・専門学校３校以上［５校］。	（2） ｱ～ｴ､ 「地域の人々や校園などと交流」　83％（○） 識字・日本語指導　31 回 出前授業　14 回 交流事業　34 回 大学・専門学校等　６校 ダンス部･軽音楽部･多文化共生部等多くの催しに参加。生徒達も意義を感じ参加している。今年度は万博のプロジェクトにも多く参加。教育庁プロジェクトにも参加した。　（◎）
		ｲ､地元の保幼小中校園ならびに大学との連携強化	ｲ､「福井高校を育てる会」の地元中学校や「豊川ネット」との連携を強化し、出前授業や交流行事、また研究授業等に積極的に参加する。あわせて大学・専門学校等の研究やインターンシップなどに協力するとともに、本校の教育活動も支援していただく。	
		ｳ､地元の協力を得て、進路未決定者にも支援者・支援機関の確保	ｳ､「キャリアパスポート」等の取組みについて、小中学校との連携を深めるとともに、必要な生徒については、本校からの進路先へも発展的に継承する。	
		ｴ､地元からのニーズが高い多文化共生についての協力強化	ｴ､日本語指導が必要な生徒のための選抜実施校であることを生かし、茨木市や地元校園・地域等の要望を受けての多文化共生の取組みに協力する。	

府立福井高等学校

働き方改革と教育力向上	（1）互いに協力しチームとして機能する教員集団	（1） ｱ､本校では教員の業務が細かく分化している傾向がある。多くが担っているあるいは経験したことがある担任業務を共通項として相互に助け合い学校の組織力を高める。 ｲ､ データの保管・管理の責任や担当者を整理・明確化し、個人情報の適生管理と業務効率の改善に努める。 ｳ､会議等の時間管理や資料のペーパーレス化、あわせて類似する業務の一本化や相互の業務理解などを進めることで働き方改革を推進する。時間外在校等時間については一定低減しているので、ストレスチェック値の低下に努める。	（1） ｱ､自己診断アンケートの「先生はお互いに協力」の肯定的回答 85%［88%］。 ｲ､自己診断アンケートの「先生は責任を持って業務にあたる」の肯定的回答 85%［90%］。 ｳ､職場のストレスチェック値：100以下［85］。	（1） ｱ･ｲ､「先生はお互いに協力」　92%（○） 「先生は責任を持って」　91%（○） 生徒からの評価で、高い数値である。継続できるよう業務遂行する。 ｳ､ 職場のストレスチェック値　75（○） ミドルトップダウンと教職員が「働き方改革」を意識していることが一つの要因であり継続していく。